

二度とない、 この舞台に 立つために

45年ぶりの地元開催となる長崎がんばらんば国体と、初開催の長崎がんばらんば大会。感動あふれる夢の舞台は、ことしの秋にいよいよ開幕します。

今回の特集では、本市開催競技のハンドボール、アーチェリー、ホッケーで国体を目指す選手や関係者にスポットを当てました。勝利をつかむため、地元で大好きなスポーツを広めるため：目標に向かって日々、切磋琢磨するアスリートたちの姿にご注目ください。

長崎 **がんばらんば** 国体 2014

平成 26 年 10 月 12 日 (日) ~ 10 月 22 日 (水)

長崎 **がんばらんば** 大会 2014

平成 26 年 11 月 1 日 (土) ~ 11 月 3 日 (月・祝)

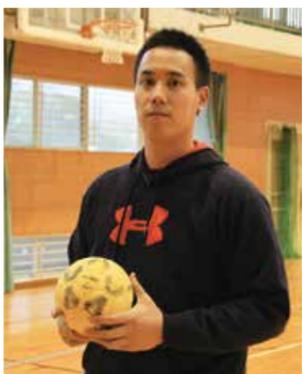


ハンド ボール

10月16日(木)〜20日(月)
東部スポーツ広場体育館など



昨年開催されたジャパンオープン決勝戦で、ロングシュートを放つ三宅さん



国体強化クラブの指定を受ける「長崎社中」は、平成22年に発足した社会人ハンドボールチームです。キャプテンを務めるのは佐世保北高OBの三宅潤さん。エースポジションのフロターで、ロングシュート得意とする選手です。ハンドボールの見どころを「走る、跳ぶ、投げる、の3要素が含まれているところ。それからスピード感、身体接触と激しいプレーですね」と話します。

長崎社中のメンバーは仕事と両立しながら、瓊浦高(長崎市)で週2回のチーム練習のほか、自主練習を続けています。全国大会に出られるのは九州大会の上位4チームだけなので、発足当初は行けると思っていなかったそうですが、持ち味のスピードを生かしたプレーで、ジャパンオープン(全国大会)では3年連続

で準優勝。そして昨年には念願の初優勝を果たすなど、社会人チームで全国トップクラスの実力を誇ります。

「長崎がんばらんば国体(以下、「長崎国体」)での目標は？」の問いに「ベスト4です」と力強く答えてくれた三宅さん。地元での国体について「プレッシャーは感じない」としながらも、国体には日本リーグ勢(美業団)が参戦するなど、さらに厳しい戦いが予想されます。目標達成に向けて、三宅さんはトレーナーと、1回やったら次回まで筋肉痛が残るほどのハードな練習を週2回行い、筋力と持久力を強化しています。

メンバーは県内の強豪校OBで構成。ほとんどが昔からの付き合いでチームワークも万全です。ただ、ミスが続いたり調子が悪かったりすると、沈み込む傾向があるため、キャプテンとして声掛けや、チームが苦しんでいる時に雰囲気を変えることを気にかけているそうです。年長者も多く、キャプテンになった当初は周囲に気を遣っていたそうですが、「最近はいよいよ雰囲気もできてきたので、試合や練習では年齢を気にせず、

お互い厳しく叱ります」と話します。

三宅さんは普段、佐世保西高でハンドボール部を指導しています。「昨年のジャパンオープンには部員たちが毎回応援に来てくれました」と笑みをこぼしました。ハンドボールに出会ったのは小学5年生のときで、担任の先生に教えてもらったのがきっかけでした。

「その出合いがなかったら、今の自分はなかったと思います。同じように、生徒にとって道しるべになればいいなと思いますね。生徒たちには相手を尊重する心、礼儀、スポーツマンシップを伝えたい。若いときは自信のあまり、周りが見えなくなることがありますから。みんなから応援してもらえようような選手になってもらいたいですね」と教師としての顔も見せてくれました。

実に45年ぶりの開催となる長崎国体。三宅さんは「この貴重な機会を大事にして、長崎社中の選手みんなが一生懸命頑張ります」と話します。本番に向けて、皆さんの応援をよろしく願います。

取材日 2月17日

アーチェリー

10月13日月・祝（15日木）

総合グラウンド陸上競技場



日本代表チームにも選出された永峰沙織さん。団体後は、来年から始まるオリンピック日本代表の選考を視野に入れる



小学校からアーチェリーを始めたという早川漣さん。「国体をきっかけにアーチェリーを始める子どもが増えれば」と願う



成年男子の選考に臨む西村義貴さん。アーチェリーの魅力を「どれだけやっても、さらに上がるところ」と話す

アーチェリー競技
国体予選は個人戦(1人72射)で、合計点を競う。直径122cmの的は中心に近いほど高得点。決勝戦は3人チームでの団体戦となる

ロンドン五輪アーチェリー女子団体では、県スポーツ専門員の早川漣さんが日本初の銅メダルを獲得。長崎はほかにも多くの有力選手を抱え、全国トップクラスの実力を誇ります。長崎国体では開催県として優勝の期待がかかります。

練習の拠点となっている長崎国際大学。70m先の的に次々と矢を命中させているのは、3年生の永峰沙織さんです。佐世保商業高3年のときにインターハイで優勝、その後も全国大会などで数多くのタイトルを獲得。ナショナルチーム特例により日本代表の選手(男女各6人)は予選を免除されるため、早川さんと同様、既に長崎国体への出場を決めています。「大学では日曜以外は毎日練習です。1日200本は射るようになっています。4月からは更に練習時間を増やしていきたい」と意欲を見せます。目標とする早川さんと、金相勲監督の下で

若い人はボランティアスタッフで参加するのもいい経験になりますよ」と話してくれました。

成年男子では、出場枠3人の選考がこれから本格化します。注目選手は本市出身の西村義貴さんです。大村工業高でアーチェリーを始め、近畿大学へ。世界学生選手権団体では優勝するなど好成績を収めました。現在は和信産業(卸本町)に勤めながら競技を続けています。自己の強みを「試合中も周囲の雰囲気にならず、ペースを崩さない」と分析します。昨年の全日本社会人ターゲットアーチェリー選手権大会では3位と好成績を収めました。東京国体ではベスト16で敗退。課題は練習量の確保です。「仕事が終わってから夜10時くらいまで、長崎国際大で学生に

実力を蓄えています。長崎国体への意気込みについては「応援してくれる人たちに、自分が弓を射る場面を実際に見てもらいたい。頑張ります」と話してくれました。

一方、早川さんは一昨年の岐阜国体では団体2位、昨年の東京国体では3位という結果を踏まえ「長崎はいい選手が集まっているけど、まだ優勝はしてません。昨年の東京国体では私のミスで勝てなかった。ことしこそは優勝です」と決意を新たに、個人戦では国体3連覇に臨みます。

最後まで何が起こるか分からないのがアーチェリーの魅力です。1本の矢で展開ががらりと変わることもあります。そうした団体戦では、会場の雰囲気も重要です。早川さんは「間近で応援してもらえたら選手力になるのかな、と思います。普段はほとんど目に見えない競技だから、実際に見て、知ってもらえるとうれしい。」

混ざって練習しています。練習時間がたくさんあった学生時代と比べて、やはり技術や体力面でレベルを維持するのは難しいですね。ことしはやり方を変えてみながら、練習するようになっています」と話します。

「ライバルは？」の問いには、高校と大学で同じチームだった松尾政博選手の名前が挙がりました。「一緒にやってきた仲間なので、できれば負けたくないですね。普段練習で会う学生たちも、選考会ではライバルということになります。国体への意気込みを「私が高校に入ったときに、国体へ向けてアーチェリーの強化が始まったと聞いていました。自分がその世代に当たったのは感慨深いですね。スタッフの方も頑張っているのので、そこにも応えられるようにしたいです」と話しました。

取材日 2月8日・16日



※昨年、本市で開催された「全日本社会人ターゲットアーチェリー選手権大会」の様子(左端が早川さん)



佐世保工業高との合同練習の様子。ながさき椿姫は川棚町での週2回のナイター練習や高校生との合同練習を意欲的にこなしています



(右)半世紀近い歴史を持つ佐世保工業高ホッケー部。23人(2月現在)の部員が所属する



(左)ながさき椿姫は佐世保東翔高、川棚高のOGを中心に結成。チーム名は県の花、椿に由来する。中央が選手兼監督の亀田和美さん

ホッケー

10月17日(金)〜21日(火)
県立佐世保青少年の天地 など

ホッケーは長崎国体では成年男女の部が青少年の天地で、少年男女の部が川棚町大崎自然公園で開催されます。成年は社会人チーム「長崎フロイント」(男子)と「ながさき椿姫」(女子)の選手が主体となって出場。今回は、成年女子と佐世保工業高との合同練習会場で、国体への意気込みを話してもらいました。

「ながさき椿姫」は平成22年に発足。国体強化指定を受ける県内唯一の成年女子チームです。メンバーは17人ですが県外在住選手が多く、通常練習に集まるのは5人から8人程度。選手兼監督の亀田和美さんは「全員がそろつのは大会や合宿のときだけです。土日休みでない人もいるので、集まるのが大変です」と話します。こうした苦労が実を結び、昨年の全日本社会人ホッケー選手権大会では見事ベスト8入りを果たしました。「選手たちにはいい経験になったと思います。長崎国体では、まずは1

勝りたいです。本番までにもっと場数を踏んで、自信を付けさせて臨みたい。結果はどうであれ、悔いの残らない試合をしたいですね」
チームには県外出身者や実業団経験者も加入。本市在住の波多野由佳さんもその1人です。実業団を経て入団、ポジションはインサイドでドリブルを駆使した攻撃が持ち味です。「20代中心で近い世代同士なので、チーム内にいい雰囲気が出ています」と亀田監督。チームの課題については「最終場面でなかなか得点できないこと。得点率が高いセットプレーを極めて、チャンスの場面ですっかりと決めるようにしたい」と話しました。

ホッケーの魅力を「ドリブルで相手を抜いたり、色んな技が決まったリしたときは、本当に楽しいです」と話す波多野選手。亀田監督も「シュートが決まったときの爽快感」と表現します。長崎国体は地元でホッケーへの関心を持ってもらう絶好の機会です。

す。亀田監督は「そのためにも応援したくなるチームを作りたい。まずは自分たちが一生懸命にやらない」と答えました。

少年男子は佐世保工業高、川棚高2校の合同チームで、これから選考を始めます。「速く攻めた方がシュートのチャンスも生まれやすい。足の速い選手が多いので、パスを細かくつなぐプレーやカウンター攻撃を武器にできるようにしたいですね」と目指すチーム像を話すのは、佐世保工業高ホッケー部監督で波多野選手の大祐(だゆう)さんです。長崎国体では監督として少年男子チームを率います。

少年の国体出場枠は全国で男女各10、九州で各1枠だけと狭き門で、これまで自力出場はありませんでしたが、今回は開催地枠で出場。長崎で



県外出身で現在は本市在住の波多野大祐さんと由佳さん。少年男子の監督、成年女子選手として、夫婦で長崎国体へ挑みます

はほとんどが高校から競技を始めるので、小中学校から続ける強豪県との技術の差が課題です。「スタートが遅い分、基礎の面はまだ。ミスでボールを奪われる場面も目立つので、動きながらボールを止める、パスを合わせる、といった基本をもっと強化していきたい」と話します。目標はベスト4。「地元の人たちが応援に来る舞台、期待もあるので簡単には負けられません」

「長崎フロイント」の選手でもある波多野監督ですが、監督になってからは部活動の技術だけではなく、生徒たちの生活面や精神的な面も気掛けて見るようになった、と言います。「自分も成長できたかな、と思います」。佐世保工業高に着任した当時は、専門の指導者もない状況でしたが、その頃と比べ環境は良くなってきたそうです。「ホッケーの裾野を広げるためにも、卒業後も競技を続ける生徒が増えて、指導者になってくれれば、と思います。市民の皆さんには国体を見に来てもらって、ホッケーの面白さを感じてもらえたらいいですね」

取材日 2月11日

国体推進室 ☎76・7103